

解 説

『意義と位置付けについて』

Q. 有効期限について？

A. 2010年代運動指針の有効期限は2020年12月31日までとなっておりますが、現在のように著しく社会情勢が変化する中では、時代背景や東入間地域やLOMの情勢等を十分に踏まえ、理事メンバーを中心に内容が相応しいかどうかのチェックは常に必要だと考えます。期限内において、運動指針の内容が相応しくないと理事会にて判断した場合は、その都度内容を変更して下さい。

また、2020年代運動指針を策定する場合の採択時期に関してですが、空白期間をあけずに2021年1月より施行したいのであれば『2020年12月総会採択』、2010年代運動指針の有効期限を終えてから検証し作成したい、また、2020年12月に採択されるであろう日本JCの2020年代運動指針の内容を踏まえて作成したいのであれば『2021年8月総会採択』、より時間をかけてじっくり作成したいなら『2021年12月総会採択』と、基本的には3通りあると思いますので、2020年度の予定者の段階で策定期間を決定して下さい。

Q. 唱和はしないの？

A. 運動指針はメンバー一人ひとりの意識に定着し、『明るい豊かな社会』を目指すものであるため、全メンバーに周知し浸透させなければなりません。皆で定期的に唱和することは大変効果のあることだと思いますので、『東入間まちづくり宣言』と同様に、総会・例会・理事会等の諸会議において是非唱和していただきたいと考えております。唱和の方法については、一つの案として、『基本理念』の部分を一人で朗読して、続けて『運動指針』の部分を全員で唱和するという方法を考えております。但し、運動指針を唱和すること、また、唱和の方法については強制ではございませんので、今後各年度において運動指針の浸透度合い等も考慮しながらご検討いただきたいと思います。

Q. 三信条、綱領、宣言、運動指針の関係は？

A. それぞれの概念の相互関係を簡単に整理すると、

- 綱領 (三信条含む)・・・個人個人の内なる決意表明 (普遍的であり不変)
- J C宣言・・・・・・・・・・明るい豊かな社会の中身の具体化
(普遍的であるが時代背景で変わる)
- 運動指針・・・・・・・・・・J C宣言に謳いこまれた内容をより具体的に
説明した道標 (スパンを限定したもの)

といったところです。ここで、運動指針等の位置付け (図解) の資料にも明記してありますが、参考までに10年単位の節を持っているといわれるJ C理念の流れについてご説明いたします。

● 第一期 (1950年代) - 「J C三信条」の時代

1950年にJ C運動の行動綱領として「個人の修練・社会への奉仕・世界との友情」という三信条が生まれ、J C設立当初のスローガンとして掲げられ、J C運動が全国に展開されていった時代。

● 第二期 (1960年代) - 「J C綱領」の時代

「J Cとは何か」の議論の中から新しい運動理念が求められ、1960年に制定されたのが「J C綱領」であり「明るい豊かな街づくり」を目指して各地でコミュニティーづくりの為の社会開発運動が展開されていった。

● 第三期 (1970年代) - 「J C宣言文」の時代

1960年代の社会開発運動を受けて「J C宣言文」を1970年に採択。J Cが目指す国家・社会のイメージが具体化された。そして、500字解説文によってJ Cとその運動が極めて明瞭にされた。

● 第四期 (1980年代) - 「J C運動指針」の時代

80年代の時代認識に立ち、J C運動の三基軸と8つの柱 (「政治」「国際関係」「防衛」「経済」「教育」「文化」「福祉」「地域社会」) が採択され、社会の変化に対応するJ C運動のあり方が提言された。

● 第五期 (1990年代) - 「新J C運動指針」の時代

西暦2000年までの長期的な洞察に基づき、予測される時代の変化に対応していくための指標が提言された。

● 第六期 (2000年代) - 「さらに新しいJ C運動指針」の時代

新世紀のスタート、ニューミレニアムの扉を開く重要な10年としてこれまでも増して運動指針の策定に力を注いだ。

Q. 東入間まちづくり宣言との関係は？

A. 『東入間まちづくり宣言』は、『2000年代運動指針』を再認識させ、運動指針を実践するメンバーの意識を醸成していく内容となっております。また、特に明確な期限は設けておらず昨年実施された検証結果からも明らかなように、今後も長期的に使用することが出来るような普遍的な内容となっており、メンバーにとって愛着のある宣言文であります。『2010年代運動指針』は、『2000年代運動指針』や『東入間まちづくり宣言』等の内容を踏襲しながら、今後10年間の運動の方向性を政策やアクションプランまで含めより具体的に広範囲にわたって指し示したものであるため、『東入間まちづくり宣言』と『2010年代運動指針』とは内容を異にするものではありません。今後『2010年代運動指針』を実践していくメンバーの意識を醸成していく為にも、今まで愛されてきた『東入間まちづくり宣言』は引き続き唱和していただき、より具体的且つ広範囲な内容に関しては、『2010年代運動指針』でご確認いただければと思います。従って、今後内容が相応しいかについて検証する際には、両方を同時に検証することが望ましいと考えます。

『基本理念について』

Q. 基本理念とは？

A. 『明るい豊かな社会の実現』という日本 JCにも LOMにもこの共通の普遍の理念がありますが、この普遍の理念に向かうために掲げる東入間 JCの理念であり、時代に即し且つそれぞれの地域に即したものがあって然るべきであります。この基本理念は今後10年間、私たちが取るべき方向のこのころの礎です。また、『運動指針』をさらに精神的な言い方で集約したものです。船の航海で言えば、灯台といったところです。

Q. 『私たち』とは？

A. 『私たち』とは、『2010年代運動指針』全てにおいての主語であり行動主体であります。それは紛れもなく LOMとしての(社)東入間青年会議所であり、さらには JAYCEEとしてのメンバー一人ひとりを指します。

Q. 『人間力あふれる人格の形成』とは？

A. 『人間力』という言葉は JCでは以前から使われてきた言葉ですが、近年では JCに限らず様々な場面で使われており、多くの要素を含んでおります。定義の一例をあげるならば、「人間力とは、変革の能動者として社会を構成し運営するとともに、尊厳や倫理観を持った自立した一人の人間としてたくましく生きていくための総合的な力」ということが出来るでしょう。しかしながら、人間力については今現在凝り固まった定義をする必要はないと思います。これからも一人ひとりがこの人間力について各々の中で深く掘り下げていくことも人間力だと考えます。また、この人間力を高めるためには、『徳器成就』を目指して、常に人格の向上に努めることが肝要であると考えます。

Q. 『結束力と行動力』とは？

A. 青年会議所がもつ団体の特性とは何でしょうか。定款に記載される私たちの目的は、「青年の英知と勇気と情熱を結集し地域社会及び国家の発展を図り、並びに会員の連携と指導力の啓発に努めるとともに、国際的理解を深め、明るい豊かな社会の実現に寄与することを目的とする」であります。私たちはこの尊い目的に向かい、様々な種類の事業を手法として取り入れ幅広い活動を行っています。公益団体として活動する多くの組織は、専門的な分野に特化した傾向があるため、当該分野においては質の高いものがあり、私たちはそれに及ぶものではないかもしれません。他の公益団体が様々な特性を色濃く打ち出している中で、東入間青年会議所としての特性をどう捉えればいいのでしょうか。私たちは創立以来、一貫して『明るい豊かな社会の実現』のために活動してきました。また、それは関わった多くの人によって受け継がれ、今もなお脈々とメンバーの心に根付いています。それは、成文法ではなく、せいぜい口伝により受け継がれてきたものであり、不言不文の語られざる掟、書かれざる掟、それだけに心の内壁に刻み込まれ、強力な行動規範としての拘束力を持ち続けています。歴史を重んじて、先人を敬い、それを後世が受け継いでいく。そして、いざ意を決した時には全員が同じ方向に向かって進むことができる。JCの三信条である「奉仕」「修練」「友情」が十分に注ぎ込まれた東入間青年会議所の風土が織り成す特性は『結束力と行動力』と言うことが出来るでしょう。今までも、そしてこれからも、『明るい豊かな社会の実現』を目指して観念や理念を提示するだけでなく、若者らしく青臭く、泥臭く、率先して具体的に行動することが私たちの使命であり存在意義なのです。

Q. 『今までに培ってきたネットワークと経験』とは？

A. 東入間青年会議所が創立以来、長年にわたり様々なJC運動を展開してきた中で築いてきた多くの市民・各種団体・企業・行政等とのネットワークと、積み重ねてきた多くのノウハウは、東入間青年会議所や東入間地域にとっての貴重な財産です。その貴重な財産と、前述した結束力と行動力を活かして、更なるネットワークの構築とノウハウの蓄積に励むとともに、それらを余すことなく活用してより良いJC運動を展開していくことが肝要です。

Q. 『市民主体で自立と共助が調和』とは？

A. 『自立』とは、公益の担い手として地方自治の民主主義のプロセスに積極的に参画し、経済活動や環境の整備等通じて社会的役割を果たすことを意味します。また、『共助』とは、様々なコミュニケーションを通じて互いが存在を認め合い、刺激し合い、競い合い、励まし合い、助け合い、共にたくましく生き抜くことを意味します。すなわち、『自立』を前提としながらも『共助』の精神を大切にする、市民の市民による市民のための社会のことです。

Q. 『「結」の心あふれる「ふるさと東入間』とは？

A. 「結」には、「ボランティア」と「ネットワーク」の意味合いが含まれています。昔の日本にはボランティアという意識や言葉はなくても、地域の中の助け合いが非常に盛んでした。「隣組」「連」「結」「講」等に見られるように冠婚葬祭から防災、清掃活動など、全てが地域の助け合いによって成り立っていました。これは決して自己犠牲のもとに成り立つ慈善事業ではなく、道徳としての「助け合いの精神」であり、日本人が古来より潜在的に心の内壁に刻み込んできた日本人としての心「和魂」なのです。しかしながら、現在の地域社会を見るとボランティアに対する偏見や、ネットワークに対するわずらわしさから、多くの住民がまちに対する無関心を装っているように見受けられます。また、そのことにより昔では考えられなかった様々な社会問題が発生しています。このような状況にあるからこそ、今一度「結」というものを見直し、現在の地域社会の中で市民一人ひとりが人間関係を大切に感じることのできるあらたな「結」を育み、人と人との絆の大切さや意識の改革に力を注ぐべきなのです。また、「ふるさと東入間」とは、地理的には私たちの活動エリア（二市一町）であることは当然ですが、ここでは心の拠り所としての「ふるさと」を意味し、ふるさとと感じられ、ふるさととして愛せるような居心地のよいまちにしたいという思いが込められています。

『運動指針について』

Q. 運動指針とは？

A. 基本理念が、やがて見えてくる灯台、灯台のあかりならば、運動指針は軌道を修正しながら確認していく羅針盤です。

- ・特に今後10年で取り組んでいくものであり、基本理念に行き着くために必ず実践していくべきことです。
- ・基本理念をより具現化したものです。
- ・基本理念が心の部分であるならば、運動指針は、声に出した宣言文というところでは。

Q. 『人間力あふれる人格の形成に努め、公益の担い手として行動しその尊さを伝えていきます』とは？

A. 『公益』とは、社会公共の利益、不特定多数の人々にとっての利益、すなわち国民・市民みんなの利益のことです。今までは公を担うのは行政、つまり、官が担うものと考えられ、官が独占してきました。しかし、現状の公的部門（国・地方）の債務超過や今後の人口減少・少子高齢化社会を考えると、現在の水準の行政サービスを持続することは困難であると言わざるを得ません。本来、公益はみんなの利益ですので、みんなで考え、みんなで決め、みんなで担うべきはずで。従って、今後は国民・市民一人ひとりが、それぞれの役割を果たす『公益の担い手』として更なる行動を求められていくことになるでしょう。そこで、私たち青年会議所メンバーがまずは率先して『公益の担い手』として行動していき、その尊さや大切さを広く伝えていかなければならないと考えます。広く伝えていく為には、まずは私たちが真摯に人間力あふれる人格の形成に努め、信頼され説得力のある人間となり、その上でリアリティと説得力のある言葉と行動で訴え続けていくことが肝要であると考えます。

Q. 『地域の将来を担う青少年との共育に取り組んでいきます』とは？

A. 「まちづくりはひとづくり」とよく言われますが、責任世代である私たちは、自らの成長とともに地域の将来を担う青少年の育成に対しても責任感を持って取り組まなければなりません。家庭や学校任せではなく、地域の子どもたちは地域で育てるという考えが大切だと思います。子どもたちにまちを伝え好きになってもらい、次のまちづくりを行うひとになってもらいたいと考えます。青年会議所ならではの青少年事業を開催して、子どもたちの成長を促すとともに、事業に参加した大人たちも、子どもたちの直観力に基づく発想や行動から多くの事を学ぶことが出来ます。地域の宝である子どもたちと共に学び、現在のまちづくりだけでなく未来のまちづくりにも繋げていく、それこそが青年会議所が行う青少年事業の目的だと考えます。

Q. 『あらたな「結」を創造するため、多面的なネットワークを構築していきます』とは？

A. あらたな「結」を構築するためには、あらたなネットワーク（絆）の構築とボランティアに対する意識の改革に取り組まなければなりません。ネットワークには様々なものがありますが、その一例をあげると、市民・NPO・各種団体・企業・行政等とのパートナーシップによるまちづくりネットワークや、異業種（商工農）ネットワークや、世代間ネットワーク等があります。そして、それらはそれぞれ単独で存在するものではなく、多くの部分でリンクしてくると思います。地域の住民同士がお互いの顔を知り、挨拶が多いまちには犯罪が少ないという調査結果もありますし、東日本大震災のような災害が起きたときに被害状況の把握や復興支援にも対応が早いと言われております。このようなあたらしいネットワーク（絆）を少しずつでも構築することにより、地域住民がお互いのことを理解しあえるようなまちにしたいと思います。そして、もっとも大事なのはネットワーク（絆）づくりが目的なのではなく、人と人との繋がりを大切に思う心を育むことが、人の絆を強固なものにするのだと思います。

次に、ボランティアに対する意識の改革についてですが、「ボランティアは自己の犠牲のもとに成立する慈善事業である」という偏見を取り除かなければ、「助け合いの精神」は生まれてこないと思います。ボランティアの語源は、英語の志願兵から来ているというのが一般的ですが、ラテン語のボランタール（自由意志）から来ているとも言われます。いずれにしても、強制されるのではな

く、自ら進んで参加するという点では共通しています。まず私たち自身がボランティアについて理解し行動すること。次に多くの市民に理解を得ること。そして気軽に参加できるシステムを構築することが望まれます。これは慈善事業ではなく「自己啓発」「仲間づくり」「青少年育成」「まちづくり」といった要素が含まれますので、まさにJC活動の視点を少し変えるだけで少しずつ進むことだと思えます。

そして、構築した多面的なネットワークを十分に活かして、東入間の地に更に広く深く、そして力強い「まちづくり」という根を張っていくことが肝要であると考えます。

Q.『東入間の魅力を発掘・存続・発展させ、広く発信していきます』とは？

A. 「まちづくり」というと、何か新しい物やイベントを創らなくてはいけないという概念が強くはびこっており、私たちはその新しい物とは何なのかを追い求め、外部からの情報を積極的に取り入れる努力をします。しかし、本当にまちを大切に思うのなら、もう一度足元を見つめなおす必要があるはずです。私たちのまちには長い歴史の中で培ってきた素晴らしい伝統・文化・風習・自然があり、そこに携わる人々がいます。自分たちのまちは自分たちで創るという地域主権といわれる時代だからこそ、「ないものねだりのまちづくりから、あるもの探しのまちづくり」への変換を推し進め、このまちに潜在する魅力的な宝物を発掘・存続・発展させ、未来へ向けて育くんでいくとともに、広く発信していかなければならないのです。

Q.『説得力のある運動を責任を持って実践し、地域から信頼されるLOMを目指していきます』とは？

A. 私たちは『明るい豊かな社会の実現』を目指す上で、まちづくりに対しての議論を数多くしていますが、その議論の結果を対外的に発信する際に、その声に耳を傾けていただけるだけの信頼を地域住民、行政、企業、他団体などから、しっかりと得られているかどうか重要です。私たちの活動を説得力のあるものにするためには、JAYCEEとしての資質の向上が欠かせないのです。LOM内での研修を積み資質を向上させた上で、青少年育成、まちづくりなどの対外的な事業に活かしていけば、さらに地域からの信頼を得られていくはずです。そしてメンバー一人ひとりの成長は、必ずやLOMとしての成

長にも繋がっていくのです。

また、私たちが行いたい事業だけを実施していただくだけではなく、行政や他団体等からの要請にも持ち前の行動力を活かして責任感をもって可能な限り応えていき、そして、今までに培ってきたネットワークを活かして、東入間地域の様々な団体等を繋ぎ合わせるコーディネーター的な役割を担っていくことで、東入間青年会議所の認知度や信頼感も高まり、地域から真に必要なとされるLOMへと昇華していくことが出来ると思います。

Q. 『組織の最適化による活力と魅力あふれるLOMづくりを進め、会員拡大に繋げていきます』とは？

A. 『組織の最適化』とは、文字通り組織を最適な状態にするということですが、この言葉には多くの要素が含まれています。LOMに当てはめて定義の一例をあげるとすると、「常に社会情勢やLOMの現状・問題点を把握して、理想とするLOMのあり方を考え、必要に応じて改善していくことで、より良いLOMを構築していくこと」ということが出来るでしょう。これは、組織の形態だけを意味しているわけではなく、組織を構成するメンバー一人ひとりやチームワーク等についても言及しています。つまり、メンバー一人ひとりが地域社会の発展のために行うべきJC運動を真剣に考え、それを実現させるためにあるべきLOMのあり方を考え、皆で議論し改善していく過程で、「LOMをよくしていこう」という意識の向上やチームワークの構築がはかれるのだと考えます。LOMの歴史や伝統や秩序は継承しながらも、その時代時代に即した最適な組織形態を構築し力強い運動を発信するLOM、メンバー一人ひとりが生き生きと活動し、自己実現でき満足度の高いLOM、そのようなLOMは活力と魅力にあふれ、LOMのファンや協力者も増え、会員拡大にも繋がっていくのではないのでしょうか。

『政策について』

Q. 政策とは？

A. 基本理念が灯台であり、運動指針が羅針盤ならば、政策はそれぞれの船とお考えください。

- ・運動指針をより具体化させたもので、且つ一つひとつの運動を確認していくためにJCのスタイルに落として、より理解しやすく、3つの項目にしたものです。
- ・この一つひとつは運動指針、基本理念に行き着いているか確認するものであり、かつ、アクションプランとして、行動を起こすときの基礎となるものです。
- ・10年を考えたときに、すべてのJCアクションは、この一つひとつの政策、運動指針、基本理念から導きだされたものであり、精通しているものでなければなりません。

Q. ひとつづくりとは？

A. 私たちは一人で生きているのではなく、他の人々との関わり合いの中で生活をしています。即ち、集団の中で生きているわけで、その集団が機能するには中心となる人間の存在が不可欠です。リーダーのいない集団は烏合の衆であり、社会的集団とはいえません。そして、その集団の機能が高いか否かは、リーダーの質にかかっていると同時に集団のメンバーの質にもかかっています。「人間は、誰しもが各種の集団のメンバーであり、ある次元ではフォロアーであると同時に、異なる次元ではリーダーである。」従って、私たちは、あらゆる集団において何かを成し得る人間になる為に、自分自身の中に良きリーダーシップを確立すべく、常日頃からの努力が大切となってきます。お互いが動機づけ、刺激し合う中から切磋琢磨し、各自隠された能力を開発し、人間形成をしていくことがリーダーシップ・ディベロップメント（LD）なのです。青年会議所の指導力開発とは民主的な集団指導力あるいは集団運営能力の研究と実践であると云われています。まず、会員個人が優れた市民・職業人である為に自らを厳しく訓練し、更に、市民社会の中であって、市民を目標にむけて一致協力するように働きかけながら市民と共に歩んでいきます。その全過程が青年会

議所のいう指導力開発、すなわち『ひとづくり』なのです。この指導力開発（LD）と後述する社会開発（CD）は現在では人間力開発（ヒューマン・ディベロップメント、HD）に集約され、日本JCの2000年代運動指針の中でJC運動の新機軸としてとりあげられました。また、前述したように地域の将来を担う青少年の育成と、青少年との触れ合いの中から得ることのできる様々な学びも『ひとづくり』の大切な要素です。

Q. 『利他の精神』とは？

A. 利他の精神とは、人を思いやる心です。自分だけの利益を考えるのではなく、自己犠牲を払ってでも相手に利益を与える、他人の幸福を願う、という人間として最も尊く美しい心です。成功を収めている人に共通しているのは、利他の精神をいつも内に秘めていることです。自分にとって何が良いかということではなく、個人の利害得失を超えて、もっと広く高く、人間にとって、世の中にとって何が良いことなのかを考える生き方です。

Q. 『アクティブ・シチズン』とは？

A. アクティブ・シチズン（ACTIVE CITIZEN）とは、直訳すると「積極的な市民」ですが、最近では、環境や地域貢献活動を積極的におこなう人を指す言葉として用いられることも多いようです。すなわち、公益の担い手として積極的に行動できる市民のことであり、多くの市民にこの精神が行き渡ることが『明るい豊かな社会』の実現への近道であると考えています。

Q. まちづくりとは？

A. 青年会議所運動は基本的に地域社会の為の運動です。全国のLOMは、すべて地域社会をより良くする為に生まれ、いずれ自分達もその土地に骨をうずめるなら、自分の子どもたちにも恥ずかしくない立派な地域社会を残そうという気持ちで取り組まなければなりません。その為には地域社会の問題にまず取り組み、その地域社会における共通した問題が広域的に発生した場合に、青年会議所全体としてナショナルな問題として取り上げるのです。基本的には、まず地域社会における運動として青年会議所運動があり、その展開の方法論として

社会開発計画（コミュニティ・ディベロップメント、CD）があります。青年会議所の活動の共通基盤は、地域社会であり、地域社会を発展させ開発しようというものです。地域社会の活性化なくして自らの生業が栄えることはあり得ないし、充実した生活を創造することも難しいでしょう。従って、地域社会をどう開発し、発展させていくかが青年会議所の主要なテーマになっているのです。

東入間地域のまちづくりの一例を紹介します。今から300年以上前に当時川越藩主だった柳沢吉保によって、三富の開拓は行われました。原野だったところに、木を植えて開拓がなされました。三富とは、「経済的に富めるだけでなく、人の心も富めるように」と論語からとり、柳沢吉保が名付けました。そこにはどんな思いがあったのでしょうか。今現在のことでなく、20年、30年先のまちの姿がビジュアライズされていたのだと思います。そして、私たちは、今こうしてこの地で生活することができています。一日一日をたとえ辛くとも逃げ出さず、知恵を出してふんばるのです。そうすることによって、それが力となり、その繰り返しによって今があるのです。これは、何も三富に限った話ではないと思います。どの地域にもこのようなことがあって、今現在があるのだと思います。つまり、継続することがいかに大切か、なおかつ、いかに難しいことなのかを思い知らされます。まちづくりは、すぐに結果が出るものではありません。長期のスパンで物事を考え、多様な繋がりを意識し、一歩ずつでも、少しずつでも前に進んでいくことが大切です。そしてそれがLOMの力になるはずです。焦らず、あわてず、ゆっくりと、確実にまちづくり運動を展開していくことが今のLOMには必要だと思います。まずは、地域の魅力を再認識し、地域のためにがんばっている人を見つけ出すことではないでしょうか。

Q. 『より居心地のよいまち』とは？

A. 東入間地域は特長が乏しいという事が良く言われますが、都心から30km圏内で商工農と自然がバランスよく調和して利便性が高い、人の温かさや繋がりを感じられて比較的災害にも強くて安心感がある、等の地域のよさをさらに伸ばしていくことによってつくられる、何となくでも居心地がよくて、居続けたいようなまちのことです。

Q. 『地域主権型社会』とは？

A. 地域のことは地域に住む住民一人ひとりが自ら考え、主体的に行動し、その行動と選択に責任を負うことによってつくられる活気に満ちた地域社会のことです。真に自立した地域主権型社会の構築は、単体行政では大変難しいものであります。そういうことを考えたときに、二市一町の一体感の創出をしていくことは大変重要なことであり、引き続き合併も含め東入間地域の将来像を考えていく必要があると考えます。

Q. 『ローカル・アイデンティティ』とは？

A. ローカル・アイデンティティ (LOCAL IDENTITY) とは、直訳すると、「地域の特性・独自性・主体性」などと表現できます。東入間は地域の特性や独自性があまりないといわれておりますが、今現在ないのであれば将来を見据えてこれから東入間の地域ブランドやシンボル等を確立し、まちづくりに活かしていきたいと思います。

Q. 『風土融和』とは？

A. 「風土」とは「風の人」「土の人」を意味します。「土の人」とはその地に定住している人（旧住民）であり、「風の人」とはその地を訪れる人や新しく移り住んだ人（新住民）をさします。（「風の人」もそこに定住すればいつかは「土の人」になります）「風の人」は旅や仕事で全国各地を転々とするわけですが、行く先々で仕事をする傍ら、自分がそれまで訪れた土地の情報や、さまざまな生活の知恵、活力を、そこに住む「土の人」に伝えます。そのように地域に新しい空気を吹き込む一方で、その土地だけにしか存在しない宝物を発見します。「土の人」も意識せずに見過ごしていた知恵や、昔からの暮らしのあり方、伝統、文化、歴史、風習などが隠し持っている意味や価値に改めて気づき、そこから新たな活力が育まれてくるということは少なくありません。しかし、現代における「風の人」と「土の人」の交流を考えると、必ずしも前述のよううまくいっているとは思えません。基本はその地域に住んでいる「土の人」であり、「土の人」が「風の人」を迎え入れることが前提となってきます。「風の人」と「土の人」の交流を密度の濃いものにするためには、「風」を心地よく感じる「土の人」の姿勢、もてなし方が大事になります。「風の人」と「土の人」

の出会いが新しい風土を形成し、あらたな文化や価値が生まれるのです。「風の人」はさらにその土地が持っている価値や意味を、他の地域に伝え広げる役目もするわけです。こうなるためには「風の人」と「土の人」の役割がほどよく混ざり合わさることが大切ですので、私たちはこの風土融和を育むための努力を怠ってはならないのである。

Q.『循環型地域づくり』とは？

A. これから求められるのは、持続可能な循環型社会であるなどと言われます。資源・エネルギーの循環や人の循環もありますが、地産地消の考えのもと、地域でとれた農産物を地域で消費する場所やシステムをつくり、地域内で農産物を循環させることも経済の循環の一環として重要なことだと思います。これはまた、遠距離輸送に必要な大量の燃料・エネルギーの消費を削減することでCO₂排出量が減るため、環境にもやさしいという利点もあります。次に、人の循環についてですが、地域を想う人が行動し、地域を想う人をつくりその輪をどんどん広げていくことによって、人を中心とした生き生きとしたまちが生まれるのだと思います。地域を想う気持ちは、自ら汗を流し、地域に携わることによって生まれてきます。多くの人々が積極的に地域に出て行き、活躍できる場を提供することが大切だと思います。また、商業と農業が結びつくことによって新たな付加価値が生まれ、商店街の活性化につながったという事例もあります。地域の特産物を作り、お年寄りに仕事を与え、生きがいを持てるようになり、地域が元気になった。結果として、自治体が負担する医療費が軽減されたという例もあります。この地域に住む人が、笑顔があふれ、交流し、失敗を繰り返しながら自分たちのまちに育てていければ良いと思います。そのまちづくりのツールのひとつとして「農業」をうまく活用するのも良いと思います。この地域は、首都圏30km圏内にありながらまだまだ農業が盛んです。農業は、農産物を生産する以外にも、環境の保護、景観の保全など多面的な機能があり、また最近「食農」「食育」などと言われるように子どもの教育問題に与える影響も大きいと思います。そして、三富地域の伝統的循環型農業のように、農業を通じて地域の歴史や文化を学ぶことができます。本来循環型社会であった農業には学ぶべきものが多いと思います。

Q. LOMづくりとは？

A. まず、LOMとは、LOCAL ORGANIZATION MEMBER の頭文字をとったもので、国家青年会議所の中に属する各地青年会議所のことです。私たちが所属している東入間青年会議所もその一つで、1983年に日本で718番目に出来たLOMであり、時代に即した変革を繰り返しながら、地域社会の発展のために様々な運動を展開してまいりました。

現在の多様性を極める社会風土において、地域社会の発展のためには民間非営利団体の存在は必要不可欠であり、地域社会からの期待や要請は今後益々増大していくと考えられます。様々な活動を通して柔軟にその要請に応えることの出来る組織たる青年会議所としては、これらの要請を我々に対する責務として捉え、時代背景に見合う、または時代が求める組織へと進化を遂げていかなければなりません。確かにこれまでのLOMの歴史に見る活動の軌跡からすれば、私たちに対するある一定の評価や認知はあると思われまゝ。それは他の誰でもない先輩諸兄や私たち自身が作り上げてきた財産であります。しかし、時代や環境が変化している今日において、それは「このままでいい」と言うものではありません。組織が更なる発展を遂げる為には、時代の変化を敏感に察知する事が必要になると思われまゝ。少なくとも頑ななまでに古きよき時代を美化することは、凡そ組織の発展とはかけ離れるものとなってしまいうでしょう。自他共に認められる組織として、時代が求める真の社会貢献的事業を透明性を保ちながら運営していく為には、しっかりとした信念をもって常に組織の最適化を模索して、時代の流れに沿ったより良いLOMを構築していく事が肝要であると考えます。

そして、そのようなLOMを構築し維持していく為には、当然のことながらマンパワーが必要であるため、会員拡大は必須であります。会員拡大の手法としては、実際に行動する実効的な面と、会員が集まりやすい環境を考えていく戦略的な面の、両面がうまく機能する必要があると考えています。LOMに活力と魅力があふれていれば、会員は集まりやすいと思います。そのためには、青年会議所に入会して活動すると得られる様々なメリットをPRするのです。LOMは基本的には会員の会費によって運営されております。従って、会員はLOMにとっての顧客という事ができ、顧客満足度、すなわち会員一人ひとりがLOMから得られる満足度を高めていくことも、会員の維持・拡大の為には重要な事だと考えます。会員一人ひとり求めていることは様々だとは思いますが、専門的な分野を専攻しない青年会議所は、言葉を換えれば、多くの分野に関する事業を展開できることが出来るため、会員からの多様な要望に応えることも可能なのです。すなわち、多様な会員一人ひとりがそれぞれ自己実現（自

分の中にひそむ可能性を自分で見つけ、十分に発揮していくこと)が出来て満足度が高い、そのような活力と魅力あふれるLOMを構築していくことこそが、会員が集まりやすい環境づくりであり、そのLOMの魅力やメリットを多くの市町民に広く伝えていけば、必ずや会員拡大に繋がると考えます。

Q.『地域のコーディネーター』とは？

A. コーディネーター (COORDINATOR) とは、「物事の流れがスムーズにいくように調整する人・機関」です。すなわち、地域のコーディネーターは、地域社会の調整役といったところでしょうか。年々多くの公益団体が設立され豊かさの本質を求めて人が動き始めています。こういった動きを止めることなく、より加速させる為には、それらを結びつける何かが必要であると思われます。団体同士を結び付けるきっかけ、団体と地域住民（個人）を結びつけるきっかけ、行政と団体、住民を結びつけるきっかけ。個別にそれぞれの専門的な分野を中心とした活動を行うことに留まることなく、そのもう少し先を見据えた「人と人とのつながり」を意識した時、ほんの些細な「きっかけ」を周囲は求めているのではないだろうか。今後私たちが目指し、または構築していくのはこのポジションではないでしょうか。多くの公益団体がひしめき合う中で、それらの多数は専門分野を中心に貢献しています。私たちは、「豊かさの本質」を求める人々に対し、自らの特性、すなわち「結束力」や「行動力」を持って、また、今までに培ってきたネットワークを活かして、そのきっかけを提供し、それらを引き合わせ、繋ぎ合わせていくコーディネーターの役割を担っていくべきだと考えます。一つのカテゴリーの探求にはある一定の完成形がある中で、きっかけを提供し人と人を繋ぎ合わせることに到達点はありません。またそれがひとつの大きなうねりとなったとき、そこから波及する効果は計り知れないものがあります。いつの時代も、どのような時代であっても、常に中心には人がいて、その関わりを絶つことは出来ません。それが基盤となるコミュニティーには自然と秩序が形成されます。秩序とは作り上げるものではありません。自然と秩序が形成されるコミュニティーを私たちのポジションで担っていきましょう。